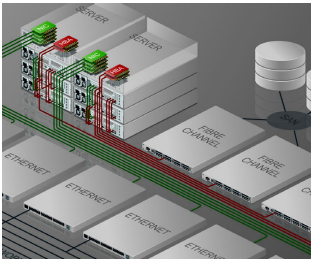
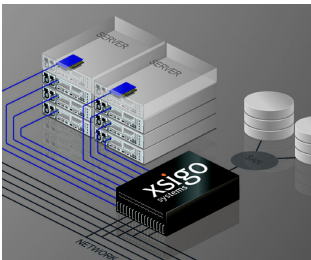


Xsigo が選ばれる 10 の理由

Xsigo を使用しない場合



Xsigo を使用した場合



1. ケーブル、カード、スイッチポートを 70% 削減

Xsigo は、サーバ I/O を統合します。データセンタでは、複雑に絡み合う多数のネットワークやデバイスを取り除くことは困難ですが、Xsigo を使えば、関係する部品数を削減することができます。配線はサーバごとに 1 つの I/O ケーブルにまとめられ、各サーバの物理 I/O カードは仮想カードで置き換えられます。この結果、カードとケーブルの数を 70% 削減できるだけでなく、スイッチポートの数も大幅に減らすことができます。

2. 初期投資コストを 50% 削減

部品数が少なくて済むということは、システム全体のコスト低減を意味します。120 台のサーバを設置する場合、初期投資コストの節減額は合計で数十万ドル（数千万円）に達し、これは I/O インフラコスト全体の半分に相当します。インフラの構築と維持に関するコストを含めると、Xsigo による削減はさらに大きくなります。

3. 100 倍の機動性

データセンタの機動性とサーバ使用率の改善により、コストを削減できるだけでなく、ビジネス目標として掲げられるサービスも迅速に提供できるようになります。Xsigo では、サーバの再起動やストレージ/ネットワークリソースの再マッピングをすることなく、ご使用のインフラを瞬時に、かつリアルタイムに必要な環境に適合させることにより、機動性を高めます。また、Xsigo は、I/O の物理接続における管理上の制約を排除することで、サーバ I/O まわりの設計・運用の自由度を向上させます。あるサーバ上で、別のサーバの I/O 識別番号（WWN、MAC、IP アドレス）を迅速に使用できるため、サーバ間でのアプリケーション移動、サーバ追加、および構成の変更が簡単かつ迅速に行えるようになります。

- **アプリケーションの移動 / フェイルオーバー**：Xsigo では、ネットワークとストレージを再マッピングすることなくアプリケーションを移動することができます。また、ドラッグ&ドロップ操作で I/O を簡単に移行できます。
- **新規サーバ配備**：ストレージおよびネットワークリソースは前もって構成できるため、新しいサーバを追加する際、迅速な配備が可能です。
- **ディザスタリカバリ**：フェイルオーバーサイトで必要な接続性を数秒で作成します。プライマリサイトと同様の I/O 構成を再構成することで、DR を簡素化します。

4. I/O リソースの一元管理とリモート管理

Xsigo では、I/O をどこからでも管理できます。ケーブルを移動したり、データセンタに立ち入ったりする必要がないため、構内はもとより世界中のどこからでも管理することができます。これにより、手順や場合によってはエンジニアの出張を省くこともできます。

5. 常に適切な I/O を実装

Xsigo では、必要な I/O を数分で取得できます。別のネットワークを追加したり、サーバストレージを iSCSI に切り替えたりするような作業も、必要な I/O を数秒で実装することができます。これにより、従来の構成変更作業と比べて、サーバ毎に要する作業時間を大幅に短縮することができます。

6. 既存の装置を利用可能

Xsigo はオープン標準に対応した製品との相互接続性をしっかりと保っていくため、ユーザーは常に現在あるサーバやストレージを利用することができます。ほとんどの代替ソリューションではベンダー固有の装置を採用しており、ユーザーは手持ちの装置を再利用できません。さらに問題なのは、特定ベンダーの装置に今後何年にもわたって拘束されてしまうことです。Xsigo は、お客様の選択肢を固定しません。

7. バーチャルマシンの配備を拡張

仮想化は、大きな管理上のメリットをもたらす反面、パフォーマンスボトルネックやセキュリティの露出を招くこともあります。Xsigo は、これらの課題に対応します。

- **VM によるパフォーマンス問題**：Enterprise Management Associates 社のアンディ・マン (Andi Mann) 氏は、最近の記事の中で、「複数のワークロードで単一の NIC を共有すると、帯域幅の利用効率とスループットに問題が生じる」と述べています。Xsigo では、10 ~ 20 Gb の帯域幅を各サーバに提供し、要求に応じて動的に共有可能です。
- **VM によるセキュリティ問題**：バーチャルマシンの移行を容易にするためには、従来の I/O マッピングの制御から離れることが必要ですが、これによりセキュリティが犠牲になる可能性があります。Xsigo では、個別の vNIC と vHBA を、特定のバーチャルマシンに割り当てることができます。アプリケーションを移動する際、接続性をマシン間でシームレスに移動することができます。

8. 基幹アプリケーションにパフォーマンスを保証

Xsigo の統合 QoS 機能を使えば、エンドツーエンドのパフォーマンス制御が可能になります。ストレージとネットワーク帯域幅の両方を、きめ細かいトラフィックポリシングで制御し、基幹アプリケーションが必要なパフォーマンスを発揮できることを保証します。

9. 高速サーバ間通信

Xsigo アーキテクチャでは、サーバを低レイテンシ、ノンブロッキングファブリックに接続して、10Gb または 20Gb の帯域幅を各デバイスに提供します。高速 I/O を実現するだけでなく、この帯域幅はサーバ間通信に使用することもできます。以下がその例です。

- **Oracle クラスタ**：RAC クラスタでの利用では、GigE 相互接続に比べてクラスタの拡張性が 2 倍または 3 倍になるというパフォーマンスメリットがあります。Xsigo の高速相互接続では、ノードを 10 またはそれ以上に拡張することができます。
- **バックアップアプリケーション**：Xsigo ファブリックをアプリケーションサーバとバックアップサーバ間のリンクとして使用すると、バックアップ作業をスピードアップすることができます。Xsigo のノンブロッキングファブリックが持つ 10 ~ 20Gb の高いデータ転送速度で、最適なストリーミングパフォーマンスを確保することにより、ピーク効率でのテープ走行を維持し、バックアップ作業を時間どおりに完了します。

10. インフラの増強

データセンタのインフラでは、変更を避けて通ることはできません。Xsigo の仮想アーキテクチャでは、新しい I/O リソースをサーバに割り当てる作業が簡素化されるだけでなく、Xsigo のモジュラー型ハードウェアアーキテクチャにより、10G イーサネットや 8G FC といった新しいサーバ接続を短時間で追加できます。また、さらに、Xsigo は標準化さらたオープン環境への対応にコミットしているため、現在だけでなく将来にわたって、お客様の選択するサーバ、スイッチ、ストレージとの相互互換性を維持します。